

第八章 副詞

主として用言の意味を限定し、又他の副詞を限定する準體言を副詞と云ひます。例へば

靜かに歩む。非常に遠い。

の靜かに「非常に」は用言を限定し、

空いと好く晴れたり。」大層丁寧に取扱つて呉れた。

の「いと」「大層」は副詞を限定して居るので、何れも副詞であります。

副詞は前の例の如く、二つ以上集つた場合に上のが下のを限定することが多うございますけれども、二つ一所に下の用言又は副詞を限定することがあります。例へば「簡単に明瞭に説明すべし。」の「簡単に」「明瞭に」が共に「説明すべし」を限定し、「昨日も今日も雨が降つた。」の「昨日も」「今日も」が共に「降つた」を限定する類であります。

副詞はかくの如く他の用言又は副詞を限定するのが普通でありますけれども、又時としては、イ體言を限定し、ロ下の一團の語句を限定し、又ハ下

の文全體を限定することもあります。例へば

僅かに一票の差を以て彼の勝利に歸したり。

たつた五十錢の金ではないか。

の僅かに「たつたは」一票「五十錢」と云ふ體言を限定し、

眞に君子なり。面貌さながら猿のごとし。

いつもせつせと働いて居る。せめて二種の外國語を學ぼう。

の眞に「さながら」いつも「せめては」君子なり「猿のごとし」「せつせと働いて居る」

又は「二種の外國語を學ぼう」と云ふ語句を限定し、

恐らくは此の説當らざらむ。

畢竟平生の心掛が悪いからだ。

の「恐らくは」「畢竟は」此の説當らざらむ「平生の心掛が悪いからだ」と云ふ文を限定して居るのであります。

副詞の中には雷に下の語句を限定するばかりでなく、其の意義を述語にかけて、それに特別の用法を起させるものがあります。例へば「ささく」用意を怠らず。「少しも知らない。」の如く、「をさく」「少しも」などと云ふ副詞が

上に來るときには、下に打消を以て應じ、「よも忘れじ。」「多分天氣だらう。」の如く、「よも」「多分」などと云ふ副詞が上に來るときには、下に想像を以て應じ、「あに他あらひや。」」「どうしてそんな事があらう。」の如く、「あに」「どうして」等と云ふ副詞が上に來るときには、下に反語を以て應じる類であります。